

書林

2013年10月16日 発行

第84号

「マララ・デー」に想う.....	1
書評.....	2~3
自著紹介.....	4
私の薦めるこの1冊.....	5~7
私の薦めるこの作家.....	7
from Library	8
図書館からのご案内.....	9
Welcome to SGU Library	10~11
編集後記	12

「マララ・デー」に想う

図書館長 山本 純

学生諸君、7月12日は何の日であるかご存じだろうか。パキスタンの16歳の少女マララ・ユスフザイさんの誕生日を祝い、国連によって「マララ・デー」と名付け制定された祝福の日である。

なぜ、たった一人の少女の誕生日を世界が祝うというのか。

いろいろ報道されたので、知っている諸君も多いだろう。そう、マララさんは母国パキスタンで女子が教育を受ける権利を訴え続け、女子が教育を受ける必要はないと考える思想を持った過激派によって、2012年10月、学校帰りに頭部と首に銃撃を受け瀕死の重傷を負った一人の女子学生である。

奇跡的に回復し、今年の7月12日、国連でスピーチを行った。そこで彼女は言った。「銃撃で私達を黙らせようとしたが、私の人生は何一つ変わっていない。死んだのは弱気、恐怖、絶望であり、・・・そして強さ、力、勇気が生まれた」と。さらに、マララさんは自分を銃撃したテロリストさえ憎まず、「彼ら過激派の子供達にも教育を」と主張する。「世界の全ての人に教育を」、「教育が第一であり、教育こそがただ一つの解決策である」と。

一少女のこの強さはどこから来るのであろうか。「本を手に取り、ペンを握る・・・それが、もっとも強力な武器」であり、「一人の子供、一人の教師、一冊の本、1本のペンで世界を変えることができる」と彼女は世界に訴えた。

今、札幌学院大学で日々学びを続けている諸君にこれ以上述べる必要はないであろう。本学図書館は61万冊に及ぶ蔵書と道内有数の開館時間を誇る。丁寧なサービスと様々な図書利用のサポートも行っている。確かに、我が国でも深刻な社会不安があるが、教育を受けようとして命を狙われることはない。

つまり、諸君は実に豊かな教育環境に身を置いているのである。マララさんの国連演説を聴けば、自分は何を考え、今後、どう行動しなければならないかが分かるはずである。もちろん、マララさんと同じことをする必要はない。それぞれの人生でよい。それぞれのあり方で社会に貢献する人間として成長するために、そして真の強さを身につけるために、本を読もう。

マララさんの国連演説は、国連のHPにて見ることができます。

<http://webtv.un.org/meetings-events/watch/malala-yousafzai-addresses-united-nations-youth-assembly/2542094251001#full-text>

※ 山本館長は、今年度〔2013（平成25）年度〕より、新図書館長として就任されています。
ご挨拶を兼ねて、巻頭言にお寄せいただきました。

莊子邦雄 著『人間と戦争：一学徒兵の思想史』

(朝日新聞出版 2013年4月)

評者 佐々木 洋 (本学名誉教授/NPO法人・ロシア極東研理事長)



罪と罰の掟(おきて)としての刑法。この掟のあり方をめぐる、わが国の代表的な刑法思想史家の一人である莊子邦雄先生(本学初代法学部長のあと本学学長)が、このほど、多少にかかわらず先の大戦を体験した世代にとっても、そして、在学生の方々の世代を含め、いまや国民の圧倒的な多数派になった、戦争を知らない世代にとっても、決して涙なしには読み進むことのできない、感動的な大著を上梓(じょうし)されました。

先生は学徒兵の一員でした。皆さんもいつか雨に煙る明治神宮外苑の「出陣学徒壮行会(1943年10月)」の映像をみましたね。ミッドウェー海戦敗北に続く劣勢と悲報が相次ぐ中、時の東條英機首相が、「文系学生」の「徴兵猶予」の特権を撤廃することにより「一億火の玉」の一大行進を演出しようと、首都圏の男女学生・生徒5万人を動員したのです。

刑法思想家としての莊子先生の研鑽は、無念のうちに才気と息吹を開花する機会を奪われ、あるいは輝ける青春が無残にも切斷された、同じ学徒兵やひめゆり学徒隊員たちに万感の思いをはせ、傲岸不遜な軍エリート・高級参謀の戦争指導思想とそれを生みだしたわが国社会の歴史構造を炙り出そうとする、ほとぼしるような気概、そこに熱源があります。

莊子先生が共にあろうとした学徒兵とひめゆりなどの学徒隊員への思いはやがて、広島長崎原爆犠牲者への思い、東京大空襲など大都市無差別空爆の犠牲者への思いに広がっていき、さらには、米軍による南北ベトナムにおける大量殺戮、旧ユーゴやイラクにおける厚顔無恥な劣化ウラン弾使用などによる未曾有の犠牲者への思いに連なっていました。

こうして莊子先生は、日米のエリート参謀の驕りと自負に根差す思想の背景に、わが国では、日清・日露戦争期に醸成された近隣諸国民への蔑視思想があることを浮き彫りにします。米軍による原爆投下や、ビキニの水爆実験、イラク等での劣化ウラン弾使用の背景に、先住民の迫害の上に建国した米国白人の天命思想があることを突きとめていきます。莊子先生の刑法思想研究は、軍と軍とが懲罰し合う戦争には、人間性の獣性への転換と併進する面があることを、実在的に論証する歴史研究でもあることが読み取れてきます。

さて、上記のような世界観と歴史観と切り結ぶ刑法思想史研究の方法を、莊子邦雄先生はいったい、どのようにして切り拓いていったのでしょうか。

正解は、「世界の文豪から学ぶ刑法思想史研究」です。文化や社会体制を超え世界で最多の読者をもつ文豪はなぜ、かくも広く読まれるのか。おそらく、文豪の思索こそが歴史的かつ思想的に最も深いからなのだと、先生は仰りたいのではないかと私はそう思います。

『人間と戦争：一学徒兵の思想史』の刊行を構想し、琴線に触れる題材を集め、筆を暖めてきた、先生の半生にも及ぶ営みを媒介したのがトルストイの『戦争と平和』でした。

本書の「はしがき」は、トルストイが『戦争と平和』で、「進軍ラッパ」が鳴り響いた途端に、今までロシア人「捕虜」に人として接してきた「ナポレオン軍」の将校と兵士が、突如「人間性」を失い、「獣性」に豹変する状況を描く場面から説きおこします。こうして第一章「原爆投下の『残虐』と戦勝国の『正義』」は「民主主義」を自負する米国軍人が、かの「獣性」を免れなかった思想的背景に迫ります。第二章「戦争の悲哀とその虚実」は沖縄戦や特攻作戦と大本営の戦争指揮の虚実に迫ります。そして第三章『戦争』断章は、東條や辻政信、服部卓四郎らの陸軍統制派が、天皇の二・二六事件への怒りに便乗して権力を独占し、軍人勅諭と統帥権を両輪に暴走していく、彼らの思想を暴き出します。

莊子先生は最後に、日露戦争時にトルストイの非戦反戦の呼びかけに最も真摯に応えたのが与謝野晶子や幸徳秋水だといいます。この指摘にも思想的に重いものがあります。

要介護5の奥様のお世話の合間を縫い、綴られた元学徒兵93歳の労作をご覧ください。

[図書館所蔵 1層書架：和書 210.75/SHO]